

がん社会 を診る

中川 恵一

中国は世界最大の「がん大国」です。2016年、米医学雑誌に公開された統計データによると、15年にがんと診断された中国人は約429万人、死亡数は約281万人で、ともに、世界全体の約3分の1を占めます。

臓器別では男女とも肺がんが死因のトップで、世界全体の肺がんによる死亡数の4割弱を占めます。世界人口に占める中国人の割合は2割もありませんから驚きです。

中国の成人男性の喫煙率は約50%で、喫煙者数は国全体で3億5千万人と世界最大のたばこ消費国です。さらに、中国人の70%以上が日常的に受動喫煙にさらされているといわれています。

中国では予防や早期発見も遅れています。がん治療にも問題があります。臓器別の5年生存率を日中で比較すると、肺がんは日本が39・1%

中国のがん対策、格差深刻

で中国が16・1%。胃がんは70・4%と31・3%、食道がんは43・4%と20・9%、大腸がんは72・6%と47・2%、肝臓がんは38・5%と10・1%、乳がんは92・7%と73・1%となり、大差がついています。とくに肺がん、胃がん、肝臓がんは差があります。がん全体でも、日本の65・2%に対して中国は30・9%と半分以下です。

中国は都市部と農村部で大きな格差があります。年齢構成を考慮したがん罹患（りかん）率をみると、農村部は都市部よりも12%、死亡率は36%も高くなっています。5年生存率も都市部の39・5%に対して、農村部は21・8%にとどまります。

がんの種類も大きく異なり、肺がん、大腸がん、乳がんといった「欧米型」のがんは都市部に多く、大腸がんと乳がんは罹患数、死亡数ともに都市部が約2倍になっています。逆に、胃がん、肝臓がんといった「感染型」は農村部に多く、胃がんでは都市部の約2倍に上ります。

こうした格差の原因について、日中両国のがん事情に詳しい中国の友人に尋ねると、農村部における知識の乏しさ、低い医療レベル、早期発見の遅れ、健康保険の不備などがあるのではないかと指摘しています。

中国政府もがん対策の行動計画を策定しましたが、私たちががん教育などの面で貢献できないか、友人と相談しているところです。

（東京大学病院准教授）



イラスト・中村 久美